

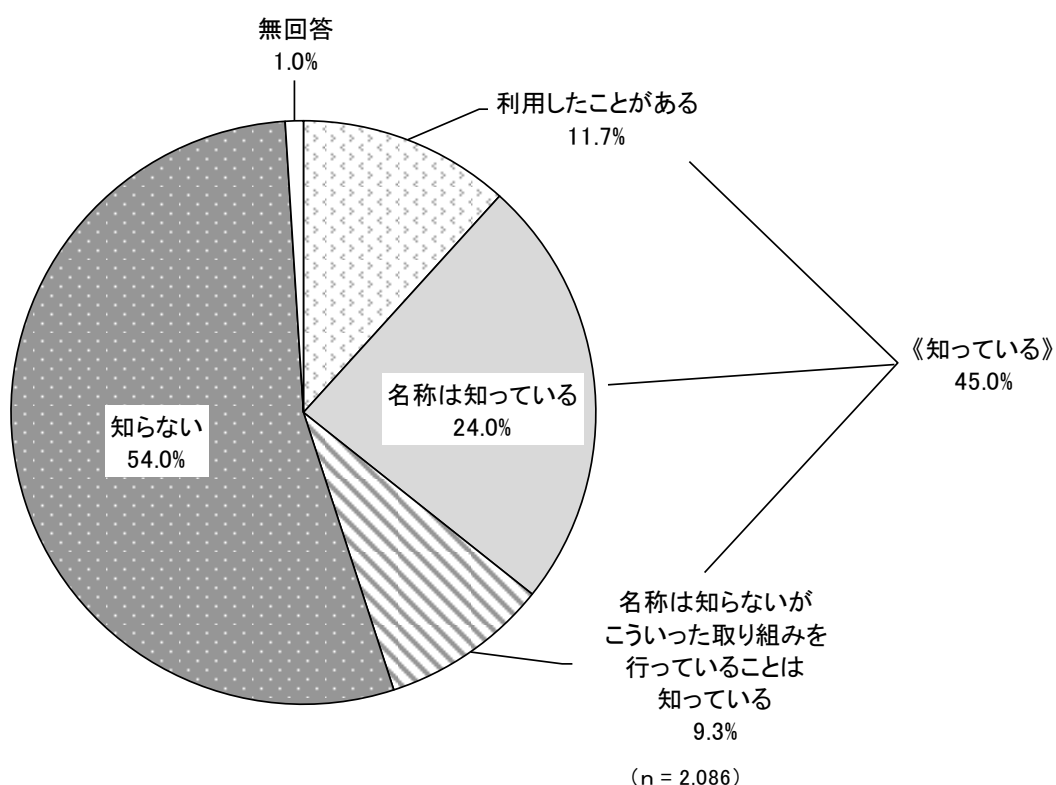
5. 福祉と医療

(1) 「福祉の相談窓口」の認知度

◎ 《知っている》が4割半ば、「利用したことがある」は1割を超える

問13 あなたは、区内28地区で実施しているまちづくりセンター、あんしんすこやかセンター（地域包括支援センター）、社会福祉協議会が連携して相談を受ける「福祉の相談窓口」を知っていますか。（〇は1つ）

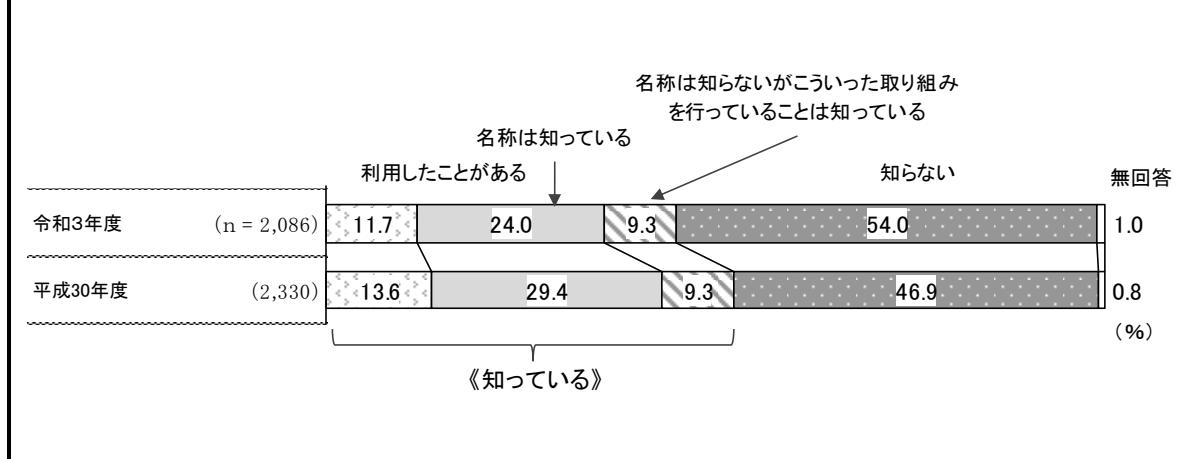
図5-1-1



<調査結果>

「福祉の相談窓口」の認知度を聞いたところ、「名称は知っている」（24.0%）、「利用したことがある」（11.7%）、「名称は知らないがこういった取り組みを行っていることは知っている」（9.3%）を合わせた《知っている》（45.0%）が4割半ば、「知らない」（54.0%）は5割半ばとなっている。（図5-1-1）

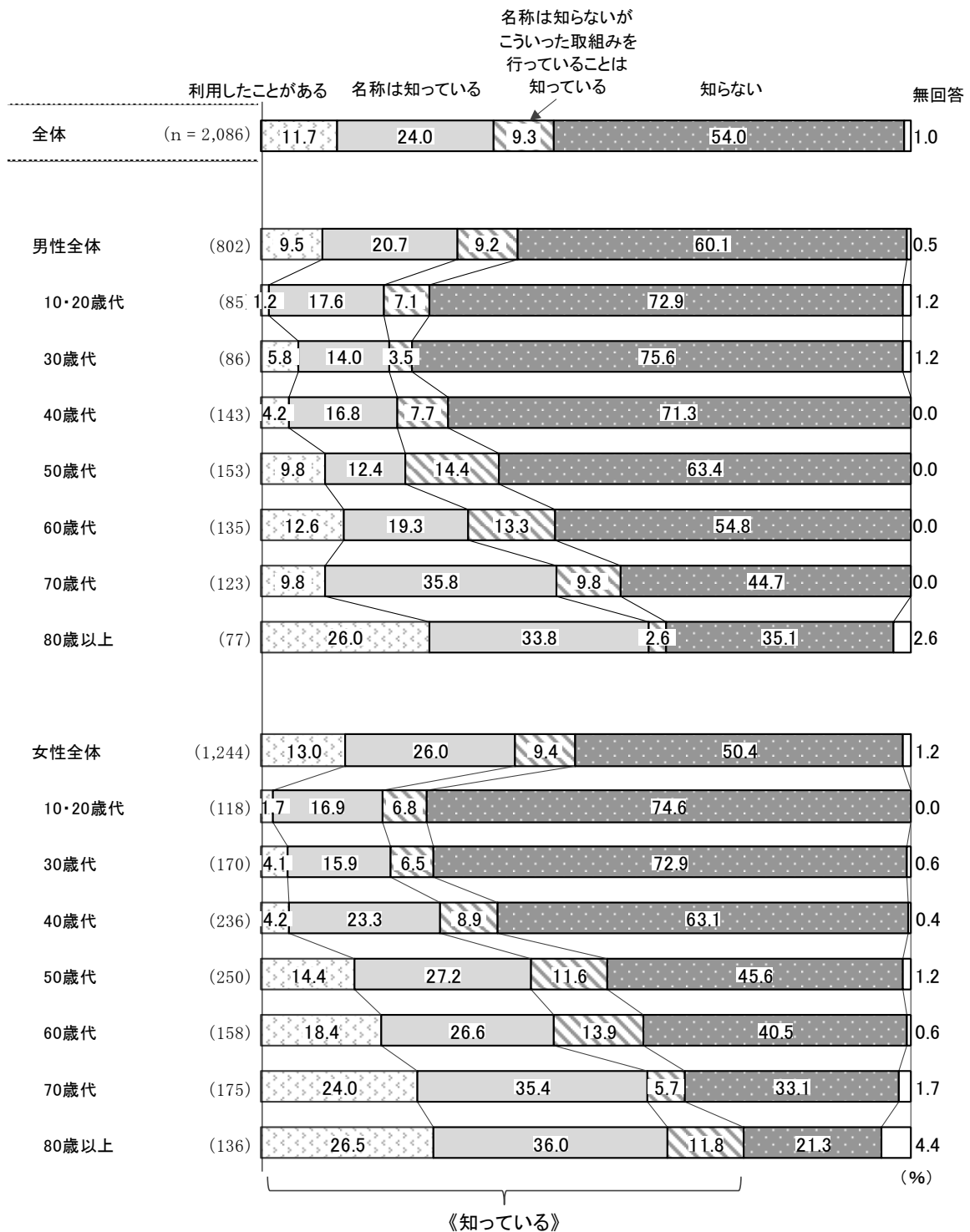
図5-1-2 「福祉の相談窓口」の認知度（時系列）



<調査結果>

平成30年度からの時系列の変化をみると、《知っている》は平成30年度（52.3%）から令和3年度（45.0%）で減少している。（図5-1-2）

図5-1-3 「福祉の相談窓口」の認知度（性・年齢別）

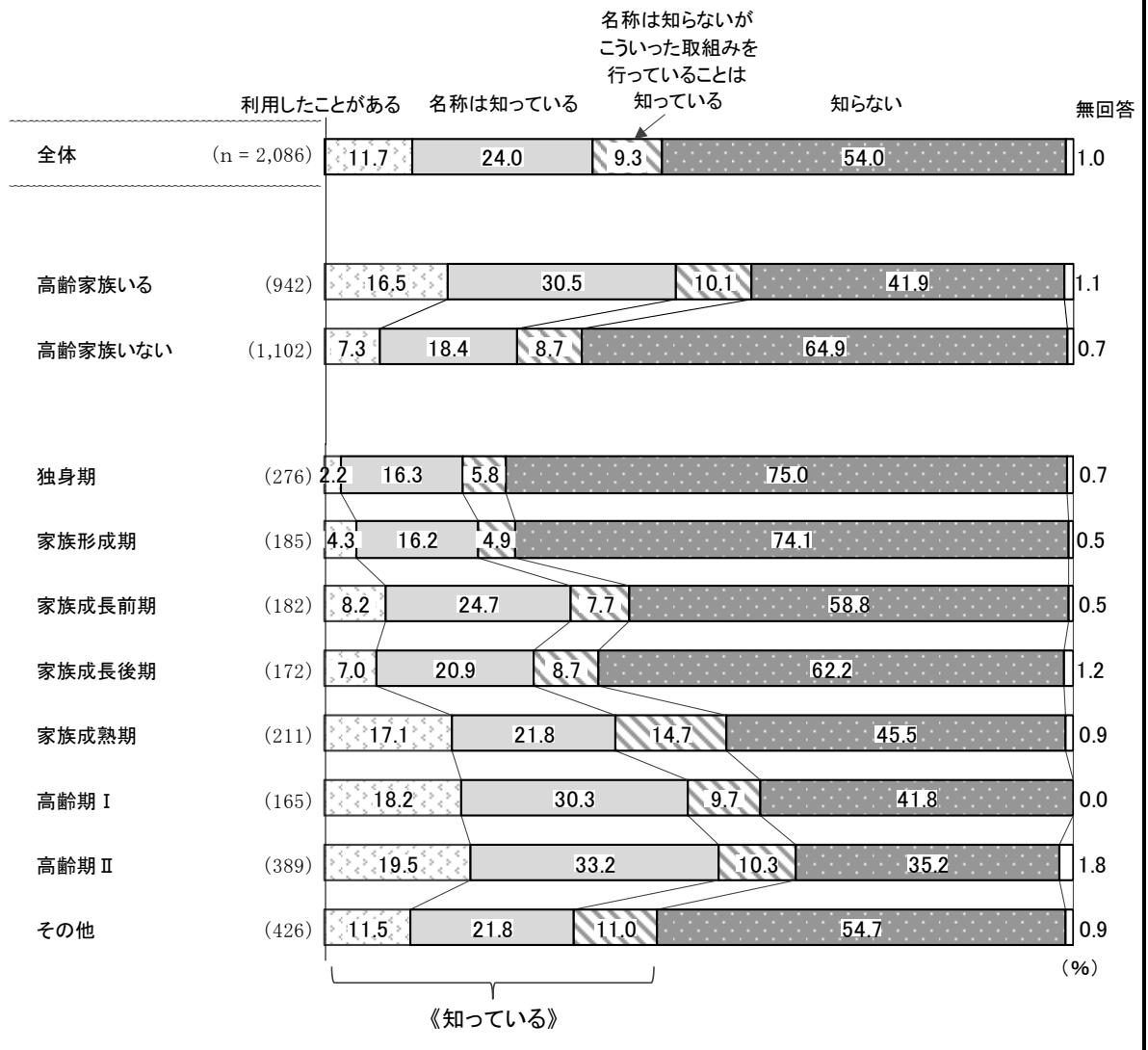


〈調査結果〉

性・年齢別にみると、《知っている》は男性の30歳代、女性の10・20歳代が最も低く、男性は30歳代から、女性は10・20歳代から年代が上がるにつれ高くなる傾向がみられ、女性の80歳以上で7割半ば、男性の80歳以上で6割を超えている。「利用したことがある」は女性の80歳以上で3割近く、男性の80歳以上で2割半ばとなっている。

(図5-1-3)

図5-1-4 「福祉の相談窓口」の認知度（高齢家族の有無別・ライフステージ別）



〈調査結果〉

高齢家族の有無別にみると、高齢家族がいる世帯は「利用したことがある」が2割近く、「名称は知っている」がほぼ3割で、高齢家族がいない世帯より高い。

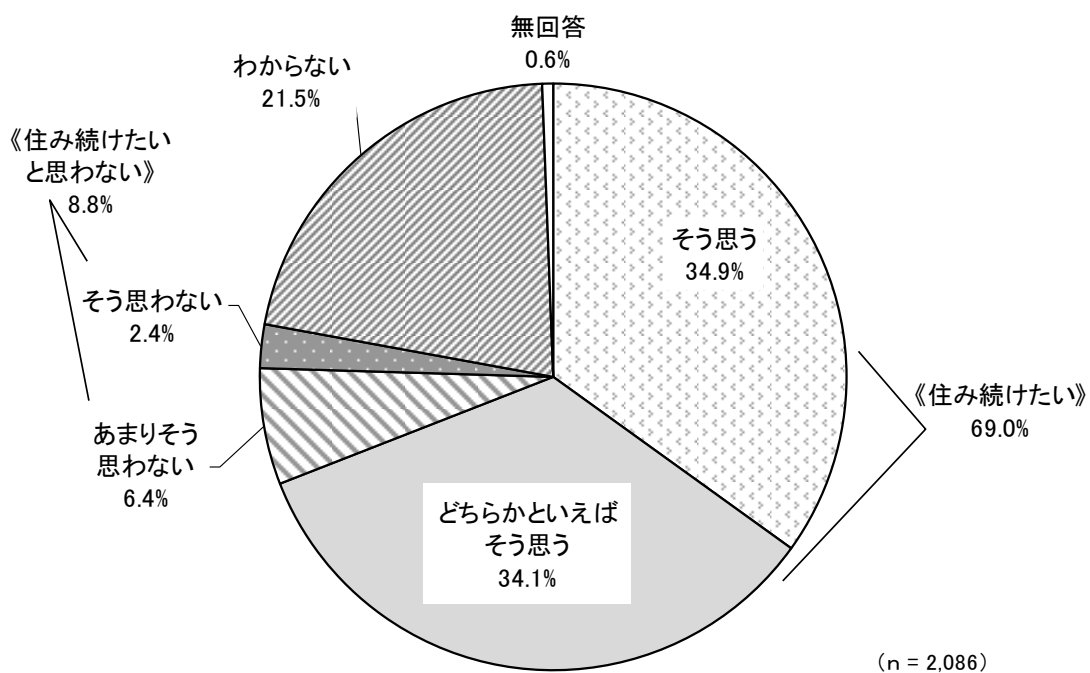
ライフステージ別にみると、「利用したことがある」は高齢期Ⅱで2割、高齢期Ⅰで2割近くとなっている。《知っている》は高齢期Ⅱが6割を超え、高齢期Ⅰが6割近くとなっている。(図5-1-4)

(2) 介護や医療必要時の居留意向

◎ 《住み続けたい》がほぼ7割

問14 あなたは、介護や医療が必要になっても世田谷区に住み続けたいですか。
(○は1つ)

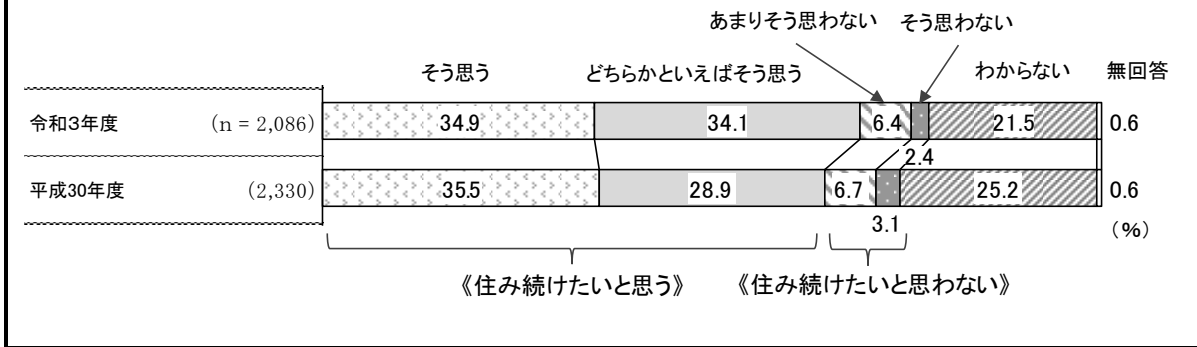
図5-2-1



<調査結果>

介護や医療必要時の世田谷区への居留意向について聞いたところ、「そう思う」(34.9%)と「どちらかといえばそう思う」(34.1%)を合わせた《住み続けたい》(69.0%)がほぼ7割、「あまりそう思わない」(6.4%)と「そう思わない」(2.4%)を合わせた《住み続けたいと思わない》(8.8%)は1割近くとなっている。(図5-2-1)

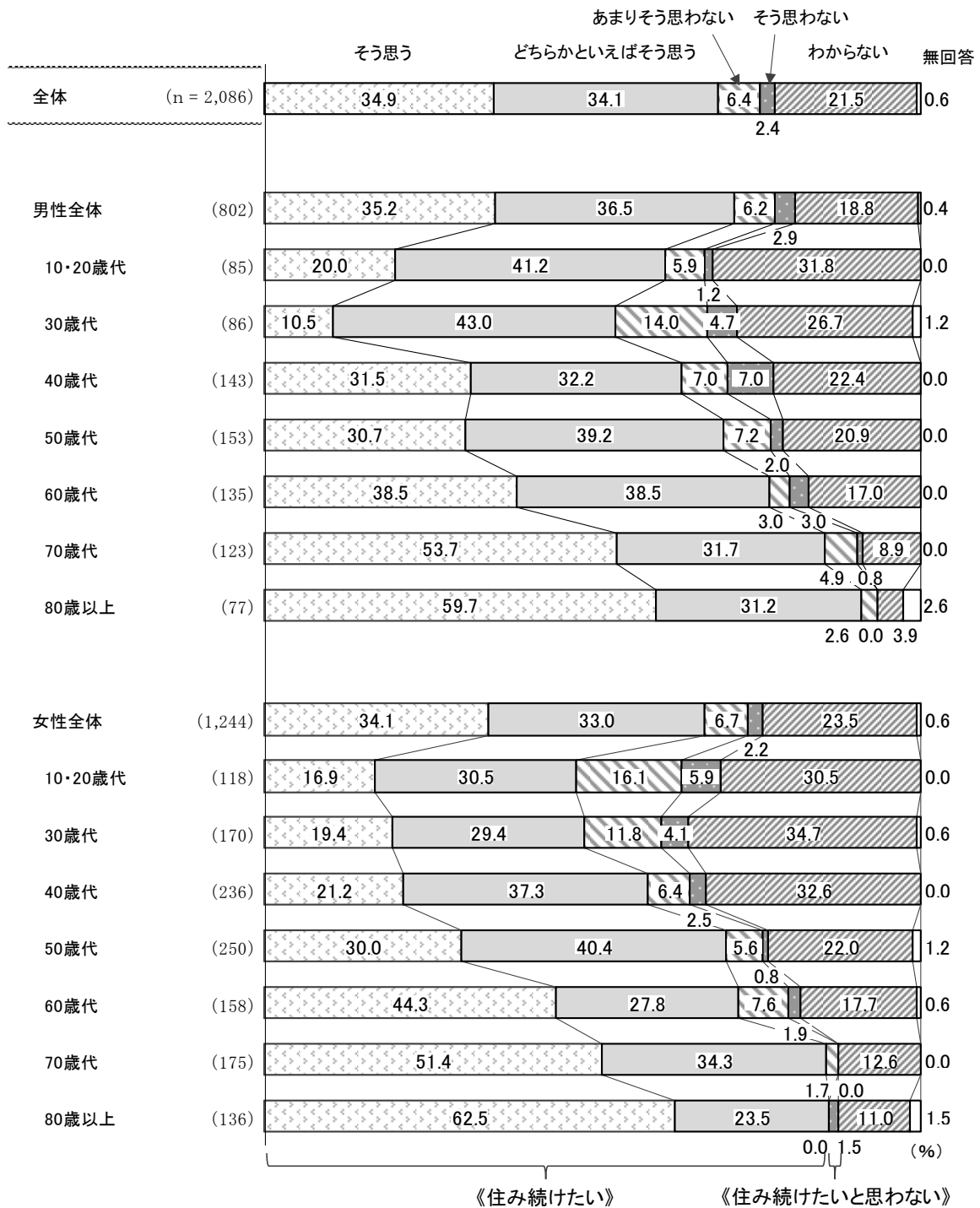
図5-2-2 介護や医療必要時の居留意向（時系列）



<調査結果>

平成 30 年度からの時系列の変化をみると、《住み続けたいと思う》は平成 30 年度（64.4%）から令和 3 年度（69.0%）で増加している。《住み続けたいと思わない》は平成 30 年度（9.8%）から令和 3 年度（8.8%）で大きな違いはみられない。（図 5-2-2）

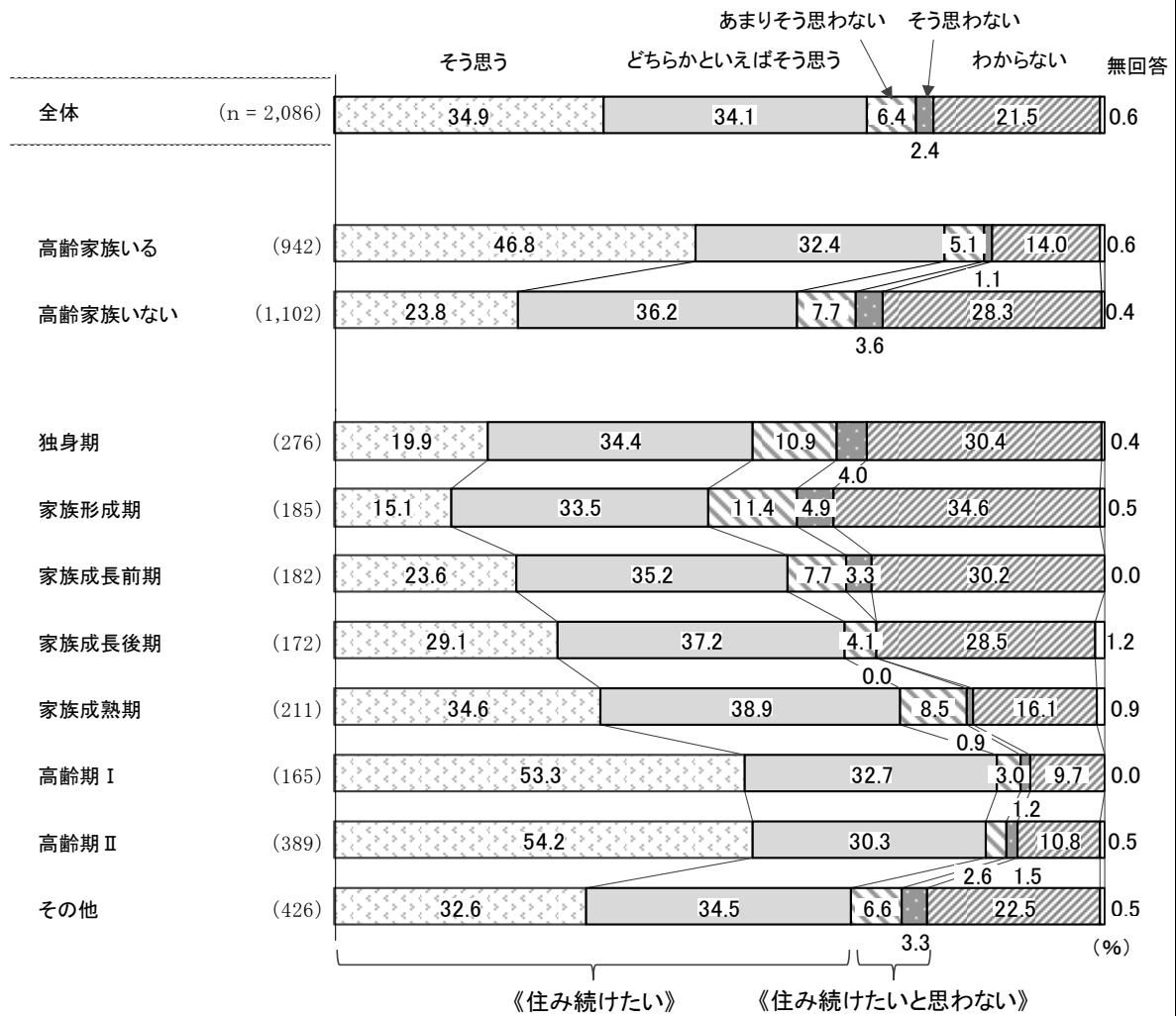
図 5-2-3 介護や医療必要時の居留意向（性・年齢別）



〈調査結果〉

性・年齢別にみると、年代が上がるにつれ《住み続けたい》が高くなる傾向にあり、男性の80歳以上がほぼ9割、女性の80歳以上が8割半ばとなっている。《住み続けたいと思わない》は、女性の10・20歳代は2割を超え、男性の30歳代が2割近くとなっている。(図5-2-3)

図 5-2-4 介護や医療必要時の居留意向（高齢家族の有無別・ライフステージ別）



＜調査結果＞

高齢家族の有無別にみると、「住み続けたい」は高齢家族がいる世帯でほぼ8割、高齢家族がいない世帯で6割である。「そう思う」は高齢家族がいる世帯で5割近くとなっている。

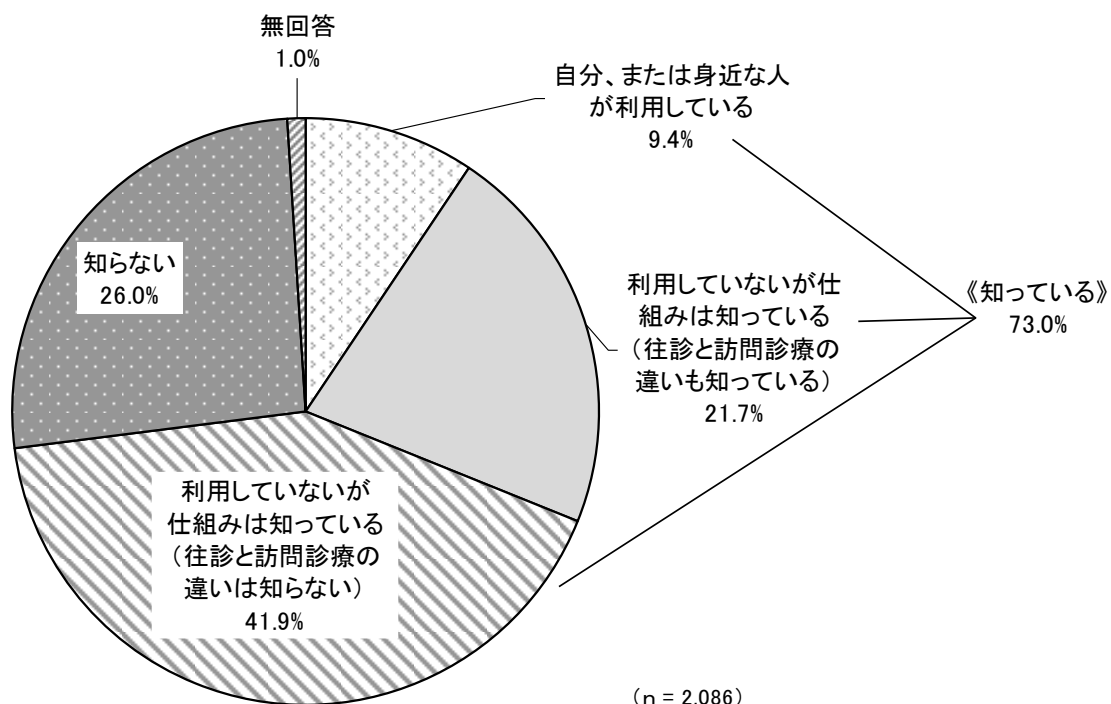
ライフステージ別にみると、「住み続けたい」は高齢期 I と高齢期 II が8割半ばで、そのうち、「そう思う」は高齢期 II が5割半ば、高齢期 I が5割を超えている。「住み続けたいと思わない」は独身期と家族形成期が1割半ばとなっている。（図 5-2-4）

(3) 「在宅医療」の認知度

◎ 《知っている》が7割を超え、「自分、または身近な人が利用している」はほぼ1割

問15 あなたは、訪問診療や訪問看護を受けながら自宅で療養する「在宅医療」を知っていますか。(〇は1つ)

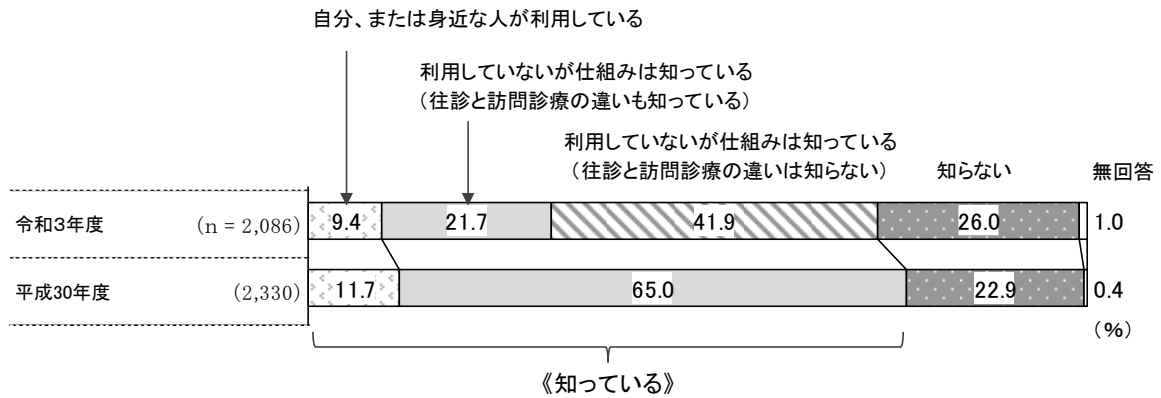
図5-3-1



<調査結果>

「在宅医療」の認知度を聞いたところ、「利用していないが仕組みは知っている(往診と訪問診療の違いは知らない)」(41.9%)が4割を超え、「利用していないが仕組みは知っている(往診と訪問診療の違いも知っている)」(21.7%)、「自分、または身近な人が利用している」(9.4%)と合わせた《知っている》(73.0%)が7割を超えている。(図5-3-1)

図 5-3-2 「在宅医療」の認知度（時系列）

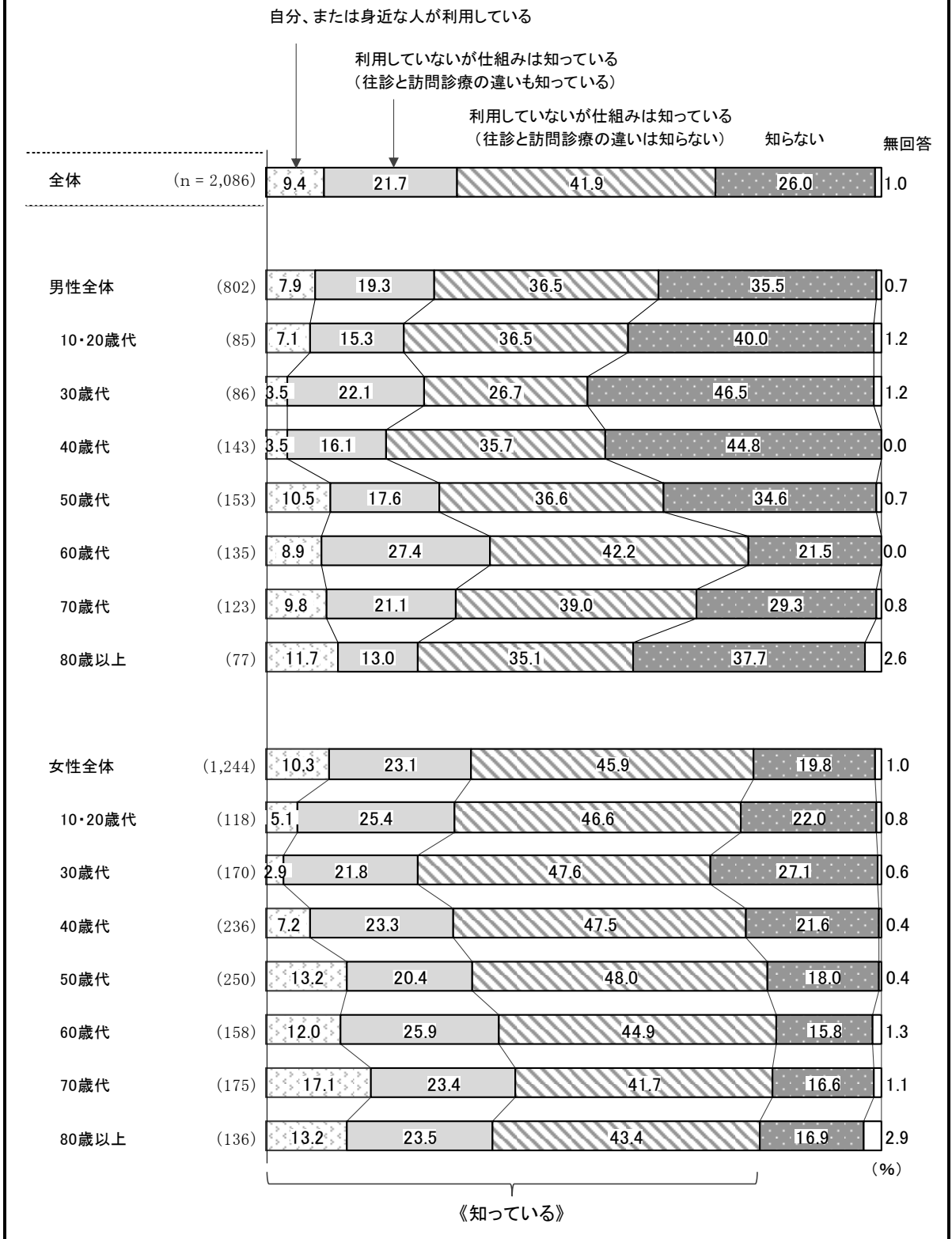


※平成 30 年度調査では、「利用していないが仕組みは知っている」はひとつの選択肢でした。

〈調査結果〉

平成 30 年度からの時系列の変化をみると、《知っている》は平成 30 年度 (76.7%) から令和 3 年度 (73.0%) でわずかに減少している。(図 5-3-2)

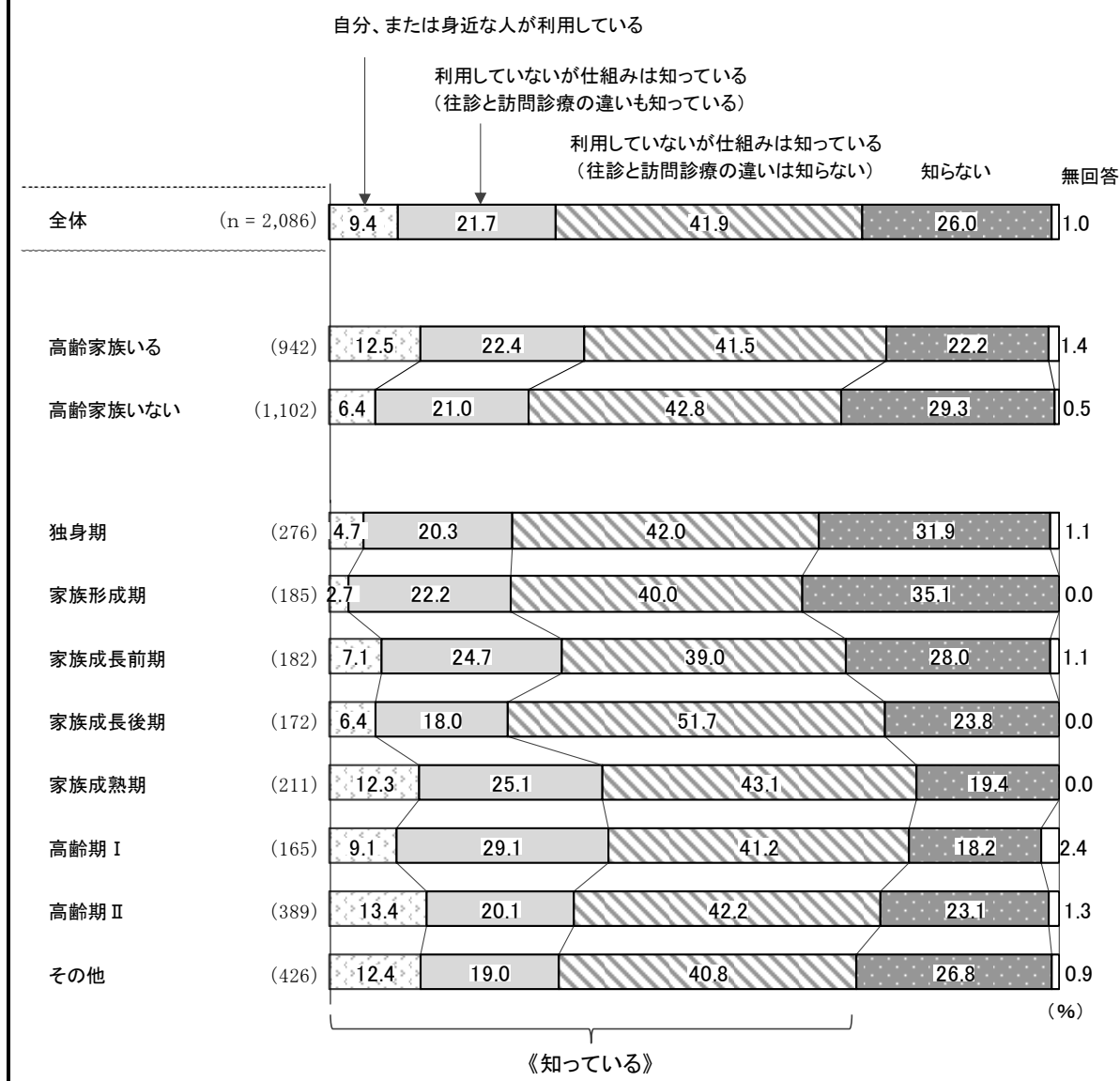
図5-3-3 「在宅医療」の認知度（性・年齢別）



〈調査結果〉

性・年齢別にみると、《知っている》は女性全体がほぼ8割、男性全体が6割を超え、いずれの年代も男性より女性の方が高く、特に女性の50歳代～70歳代は8割を超えている。
(図5-3-3)

図5-3-4 「在宅医療」の認知度（高齢家族の有無別・ライフステージ別）



〈調査結果〉

高齢家族の有無別にみると、「自分、または身近な人が利用している」の割合は高齢家族がいる世帯で1割を超え、高齢家族がいない世帯のほぼ倍となっている。

ライフステージ別にみると、「自分、または身近な人が利用している」と「利用していないが仕組みは知っている（往診と訪問診療の違いも知っている）」を合わせた割合は、家族成熟期と高齢期 I で4割近くと、他の層よりも高くなっている。（図5-3-4）